

「大学生の勉強法」を教える初年度授業

— 「言語文化基礎演習」の授業内容とその改善プロセス —

教養学部教授 佐伯 啓

はじめに

1. 何のための授業か
2. 授業の具体的内容
3. 授業改善のプロセス
 - 3.1. 2000年以前
 - 3.2. 2000年～2003年 — 教員ミーティングの実施、DTP教材の制作
 - 3.3. 2004年 — 1年間に書かせる課題内容の確定
 - 3.4. 2005年 — 担当教員を10人に増員
 - 3.5. 2007年 — Webを使ったレポート提出・公開
4. これまでの授業運営で見えてきたこと

おわりに

はじめに

言語文化基礎演習は、私が所属する教養学部言語文化学科の学生が入学最初の年に履修する、必修基礎科目である。この授業は学科の新入生全員に大学生としての勉強法を身につけてもらうことを目的とした実践的科目である。ひとりひとりの学生にきめ細かい指導を行なうために、開講形態も少人数制のクラス編成を基本としている。過去数回のカリキュラム改革の中で授業方法と教授内容にも少しずつ改善の手が加えられ、4年前からほぼ現在の開講形態に落ち着いている。

指導内容の根幹をなすのは、大学での学問に必須であるところの研究の基礎技術の習得である。シラバスにも掲げているように、この授業では、パラグラフの理解、レポートの作成、ディスカッションの実践、説得的な論証など徹底的な技術演習を通して、学術研究に必須の諸技能（読む能力、書く能力、聞く能力、論ずる能力等）を育成することを目指している。担当する教員にとってもハードで根気のいる授業ではあるが、この授業の存在意義と教育効果については、授業評価も概ね4.0～4.5の間を推移しており、学科教員からも、上級学年になって学生たちのレポートの書き方が上達している等、一定の評価を得るようになってきている。

現在の開講形態に至るまでのこの10年ほどの間に、この授業にもいくつかの紆余曲折とさまざまな試行錯誤があった。本稿では、この授業が現在の形態へと至るまでの改善のプロセスを大まかに辿りながら、大学の初年次教育に求められる要素をここで一度整理し、現時点での問題点と今後の課題を明らかにしておきたいと思う。

1. 何のための授業か

大学での学問は高校までの学習と何が違うか。そのことを新入生に一言で伝えるとすれば、「自ら考える力を養うこと」となるであろうか。高校までの勉強の重点が「知識を習得する」ことに置かれているとすれば、大学の勉強の場合、「課題を解決する力を育成する」という要素がそこに加わる。人生のさまざまな場面で遭遇するあらゆる課題や困難に対して、問題の所在をひとつひとつ冷静に分析・判断し、解決のための方法を考え、推論と検証を重ねて説得的な結論を導き出し、その成果を他者に示して論の妥当性を問う。「論文を書く」という作業は、そういった一連の知的作業を行なう力を身につけるためにはもっとも効果的な練習であるといえよう。自らが問いを提起し、資料を駆使しながら論証し、説得力のある結論へと至るひとつひとつのプロセスが、最終的には自ら考える力の礎となるのである。

論文やレポートのような学術的文章を書く訓練は、日本の学校教育（特に中学・高校）においてももっとも疎かにされてきた部分だと言ってよい。最近ではAO入試等の受験対策のためもあってか、予備校や進学校では小論文指導も徐々に行なわれるようになってはきたが、それはせいぜい800字程度の論述文の書き方であり、資料を駆使して地道な論証を行なうための文章力育成にはほど遠い。もっとも、学校で書かされる文章といえば感想文や生活文が中心で、自分の感じたままを、できるだけ率直に、ありのままに表現することが奨励されてきた日本の作文教育の伝統の中で育ってきた高校生が、大学に入っていくなり学術的な論証スタイルを要求されても、とまどうのは当然である。

インターネットからコピーペーストしただけのレポートや、とても学術的とは言えない幼稚な卒論がはびこることの背景には、大学教員の側にもおおいに責任がある。研究に必要な基礎知識と学術的な文章作法を丁寧に指導する教員もいる一方、「論文の書き方など大学生なら自分で学ぶものであるし、そもそも自分が学生だったときもそういう指導はなかった」と言って憚らない教員が未だに存在することも否定できない。だが高校までに一度も習ったことがないことを、大学生なのだから自分で何とかしろというのは無理な話である。とりわけ私が所属する教養学部の場合、狭い意味での専門に偏らないリベラル・アーツの自由度を学部の特色として掲げている分、放っておけば、「学際的」とは名ばかりの「何でもあり」の卒業論文が溢れてしまう。4年次の卒業研究を必修とし、学生たちひとりひとりの興味と関心に沿った幅広い

研究対象を論文のテーマに選ぶことができるという理想を維持するには、どんな研究対象を選んだ場合にも応用可能な、論文執筆のための基礎トレーニングが欠かせないのである。

2. 授業の具体的内容

言語文化基礎演習で実際にどのようなトレーニングを行なっているかという点、まず入学したての1年生（毎年約130人前後で、そこに編入生や若干の再履修生が加わる）を1グループ15人程度の10クラスに分け、クラスごとに学科の専任教員が1人ずつ張り付く。つまり毎年10人の教員がこの授業を担当する。本来なら学科所属教員全員が交代で担当するのが理想だが、現実的にはなかなかそうもいかないのが、今のところ延べ約20人の教員が、1年おきのローテーションで受け持っている。通年週1回の授業時間の中で、大学図書館の使い方、文献の探し方、専門書の読み方、ノートやカードの取り方、論文のトピックの見つけ方、論文の構成の仕方、引用や注の付け方、執筆ツールとしてのコンピュータの使い方、議論の仕方、口頭発表の仕方といった学術研究に必要なスキルを、一通り実践的に習得させる。

もっとも重視しているのは、学術的な文章の書き方についての訓練である。年に3回提出させる課題レポート（1200字のブックレポート、教員が文献資料をすべて用意し、トピックも指定する2000字のミニ論文、学生が自分で文献を集め、トピックを考える4000字程度の中論文）にはそのつど教員が赤を入れ、個別に面接をして批評し、修正すべき点とその理由を説明した上で、レポートの再提出をさせる。4年次の卒業研究に向けて論文執筆の基礎力をしっかりと身につけさせるために、論理的で説得力のある文章を書くためのトレーニングには、学科としても特に力を注いでいる。

3. 授業改善のプロセス

言語文化基礎演習の授業内容とその開講形態は、2005年あたりからようやく現在のスタイルに落ち着いてきたところである。以下、この授業がどのような変遷を経て現在の形に至ったのか、授業改善のプロセスを中心に概観してみよう。

3.1. 2000年以前

言語文化基礎演習は、本学科の出発点である教養学科言語科学専攻（その後、さらに言語文化専攻と改称）の時代に実施されたカリキュラム改革により新しく設置された科目で、論文作成のための基本的なスキルを学ぶ授業として設置された。たとえば1999年度のシラバスでは、授業内容は次のように説明されている。

「基礎演習」1年→「原典講読」2年→「演習」3年→「総合研究」4年の流れの中で、「言語論」研究、「文化論」研究、「地域の言語と文化」研究に関する入門書・啓蒙書を読みながら、専門書の読み方、資料の集め方、議論の仕方、発表の仕方、レポートの作成などを学ぶ。

基礎演習の担当教員は当初4人であった。学生を学籍番号順にA、B、C、Dの4グループに分け、4人の教員が4つのグループを回り持ちで4サイクル担当するという仕組みである。授業内容はゼミ形式で行なわれ、学科の専門に絡む、やや難しい文献を読みこなす練習に時間を費やした。成績については、授業時の発表、出席率、各期1本計4本のレポート提出を勘案して付けていた。

1999年まで、基礎演習はこのスタイルで開講していた。だが授業の運営面で徐々に問題が生ずるようになる。最大の問題は、教員4人それぞれの担当分の授業内容については、それぞれの担当者の判断に委ねていた点である。学術研究に必要なスキルの伝達という共通理解は担当者同士で有してはいたが、教員間のミーティング時間もなく、4つのグループに分かれた新入生たちが4人の教員の授業をローテーションで回って本を読むだけでは、目に見える成果が得られにくかった。

3.2. 2000年～2003年 — 教員ミーティングの実施、DTP教材の制作

基礎演習の授業内容に抜本的な改革がなされたのは、2000年である。この年から新たに授業担当者となった教員4人が学期前に何度もミーティングを重ね、春休みいっぱいをかけて、「1. 文献を集める」、「2. 文献を読む」という2冊のDTP教材をこの授業のために自作した。

特に重視したのは、図書館の使い方に関する指導である。大学の中心は図書館であり、大学の学問は本を読むことが中心であると理解させることがその目的である。そのために、図書館の使い方を教員みずから具体的に教える実習時間を新たに設定した。

図書館実習は、担当教員が学生たち（1グループ30人ほど）を連れて図書館へ行き、文献の集め方、資料の調べ方を目の前で具体的に示すといった内容である。授業開始時の早い時期に、4つの班が交代でこの実習を1回ずつ行なった。実習の手順は、まず図書館内のビデオ室で、本学の図書館案内ビデオ（15分）を見せる（最初の頃は業者が作成した文献検索に関する別のビデオも合わせて見せていたが、授業時間の関係もあり、翌年からはこちらのビデオは割愛した）。ビデオにより本学図書館の基本的な使い方を理解させたあとで、担当教員の引率のもとに地下2階から地上2階までを見学する。その際、1)参照した図書は自分で書架に戻さないこと、2)複製には申し込みが必要なこと、3)立て置き雑誌の裏のボックスにはバックナンバーが収納さ

れていること、4)地下書庫を利用する際はその旨を伝えて入館証を受け取ること、などの説明も合わせて行なう。そして最後にOPACの端末を用いた文献検索を体験させて、必要な本を探させる。

また、この年から、文献を読む練習の期間（授業前半）にこの授業で使用するテキストは、4つの班とも同じものを使うことにした。4人の教員の授業をローテーションで回すことをやめ、教員と学生の組み合わせを4つの班で1年間固定する代わりに、テキストも共通にすることに決めたのである。最初に共通テキストとして選んだのは、小浜逸郎『なぜ人を殺してはいけないのか — 新しい倫理学のために』（新書y 2000年）である。この年は「死」の問題を扱うことを教員同士で決めていたので、授業では、死刑廃止論や自殺等の問題をトピックに議論やレポート作成を行なった。授業運営に関する担当者間の合意事項としては、年に2回レポート（前期は短いもの、後期はやや長めのもの）を書かせること、前期は文献の精読を中心とし、学生たち全員に担当箇所について口頭発表の練習をさせること、後期は学期末に提出させるレポートの構想発表や中間報告を行ないながら、提出されたレポートは必ず添削し、個別に面接も行なうこと等であった。

2000年から2003年までは、授業で読むテキストを毎年新しくした以外は、上述したやり方で授業を行なった。4人の担当教員は、ほぼ毎週のようにミーティングの時間を持ち、それぞれの班の授業内容が大きく異ならないよう注意を払った。共有できる教材は提供し合い、受講学生たちの反応についても情報交換を行なった。現行の授業内容の骨組みは、この4年間の中での議論と経験がベースとなっている。

3.3. 2004年 — 1年間に書かせる課題内容の確定

前年までの試行錯誤を経て授業構成がほぼまとまった2004年には、年間に書かせる課題内容を、ブックレポート、ミニ論文、中論文という3つに確定した。大学の授業でしばしば出される課題である「レポート」という言葉には、教員たちにも学生たちにも共通した理解がない場合が多い。一般的には「授業で聞いた内容や、自分が本で調べたことを手際よくまとめた文章」とでも定義できようが、短めの論文や書物の要約・紹介をレポートと呼ぶ場合もあり、その場合は論文とレポートの違いが曖昧で学生たちにもわかりにくい。ミーティングの中で、「レポート」とは何かを正確に定義しておく必要があるという結論になったのである。話し合いの末、われわれの授業に関しては、レポートは「ブックレポート」だけを指すことにした。ブックレポートの課題提示に際しては、学生には以下の文書を示した。

課題1：ブックレポート（1200字程度）

ブックレポートとは、単に本を要約することではありませんし、思ったことを自由に書く読書感想文とも違います。著者の言わんとしていることを、読み手のあなたが第三者の立場で正確に紹介することが課題です。たとえば「グローバリゼーションは単一の価値観を生みやすい」という著者の主張を詳しく紹介したい場合は、「この本の中で著者は、グローバリゼーションは単一の価値観を生みやすい、と主張している。そしてその根拠として挙げられているのは...」といったぐあいの書き方になります。第三者としてのスタンスで本の内容を紹介する文、それがブックレポートです。紙数に余裕があれば、著者のことあるいは本全体の構成等についても言及すべきですし、書評論文のようにさらに学術的なブックレポートになると、著者の論点をさまざまな角度から批判的に吟味し、その書物の研究史的な位置づけを行うといった作業も必要となります。今回のブックレポートでは、執筆字数も少ないので、最低限、以下のようなポイントに留意して簡潔にまとめてくれれば合格です。

この章で取り扱われている中心テーマは何か／章全体はどのような部分で構成されているか（小見出しを参考に）／特に重要な概念は何か／著者は何を主張しているか／著者の主張の根拠は何か等々。

ついでに、この年の年間授業計画も合わせて示しておこう（図1）。

2004年度 言語文化基礎演習 授業予定								
演習テーマ	演習内容	スケジュール						
		回	月日	Aクラス	Bクラス	Cクラス	Dクラス	
		1	4月19日	4クラス合同: オリエンテーション				
	図書館のこと、発言の練習	2	4月26日	各クラス別授業	各クラス別授業	各クラス別授業	各クラス別授業	
トクモ文 をレ、献 書ポブを く、1つ読	○図書館活用の実習 ○パラグラフを読みとる ○ノートにしながら読む ○ブックレポート(2000字程度)の作成	3	5月10日	図書館活用の実習	文献読みの演習(1)	文献読みの演習(1)	文献読みの演習(1)	
		4	5月17日	文献読みの演習(1)	図書館活用の実習	文献読みの演習(2)	文献読みの演習(2)	
		5	5月24日	文献読みの演習(2)	文献読みの演習(2)	図書館活用の実習	文献読みの演習(3)	
	使用文献: 羽谷剛彦「教育改革の幻想」ちくま新書 2002	6	5月31日	文献読みの演習(3)	文献読みの演習(3)	文献読みの演習(3)	図書館活用の実習	
ミニ 論文 を書 く	○2000字程度のミニ論文作成に挑戦。	7	6月7日	参考文献を共に読む。				
	テーマ、トピック、文献を指定された	8	6月14日	参考文献を共に読む。				
	上で、文献読み、アウトライン作り、文章化を、自分で試みる。	9	6月21日	参考文献を共に読む。				
		10	6月28日	ミニ論文アウトライン作成など				
	指定テーマ: 「ゆとり教育批判」	11	7月5日	引用、注釈についての説明を折り込む				
	指定トピック: 4つ提示し、1つ選ばれる	12	7月12日	個人面接他、各グループで自由に				
			9月6日	ミニ論文提出しめきり				
				担当教員がそれぞれ読み、添削、コメント、返却				
中 論 文 を 書 く	○4000字以上の中規模論文に挑戦。	13	9月13日	グループごとに中論文のテーマを検討、決定				
	テーマだけが指定され、トピック探し、	14	9月27日	(1) テーマ関連資料コピー1つ配付、論文を書く心構えなど話す				
	文献探し、文献読み、アウトライン作り、	15	10月4日	(2) 渡しておいたコピー資料を出発点に、トピックを考えさせる、ディスカッション				
	文章化は、自分で試みる。	16	10月18日	予備(図書館で文献検索などをさせてもよい)				
		17	10月25日	(3) 仮トピックと文献リストを発表させて、コメント(半分)				
		18	11月1日	(4) 仮トピックと文献リストを発表させて、コメント(半分)				
		19	11月8日	(5) 論文アウトラインを発表させて、質疑				
		20	11月15日	(6) 論文アウトラインを発表させて、質疑				
		21	11月22日	(7) 論文アウトラインを発表させて、質疑				
			22	11月29日	予備日、月末までに中論文提出(ここから添削)			
			23	12月6日	中論文面接(1)			
			24	12月13日	中論文面接(2)			
		25	1月17日	修正した中論文を再提出させる、まとめ				

3.4. 2005年－担当教員を10人に増員

科目名称が「言語文化基礎演習」となり、担当教員10人という現行の体制がとられるようになったのは、教養学部地域構想学科が新設され、それまでの「教養学科言語文化専攻」が「言語文化学科」となった2005年以降である。新学科のカリキュラム委員会での討議により、この科目の担当教員の負担を軽減し、同時にこの授業の意義を学科の教員で共有すべきであるとの観点から、この科目の担当教員を4人から10人に増やした。ただし開講コマ数を倍以上に増やすのは学部全体のコマ数から考えてとうてい不可能だったので、開講コマ数は5コマとし、担当者のペイを半分にすることで、10人の教員で5コマを開講するという対応策をとった。担当教員が4人のときは、ひとりの教員が30人分のレポート・論文を添削していたので大変な労力を必要としたが、担当教員が10人になればひとりの担当学生数は15人以下になるので、教員の負担が軽減されるだけでなく、さらにきめ細かい指導が可能になるだろうという判断もあった。

この年は、ブックレポート、ミニ論文、中論文という3回の課題提出は前年と同様とし、ミニ論文の課題内容については以下のような内容にした（執筆資料となる3つの論文コピーも教員が用意）。

課題2：ミニ論文（2000字程度）

（共通テキストは、山田雄一郎『英語教育はなぜ間違っているのか』ちくま新書 2005年）

以下の4つのトピックからひとつを選び、授業でテキストとした山田氏の本および3つの論文コピーを資料として、ミニ論文を作成してください。

- ① 小学校の英語教育には意義があるか。
- ② 小学校に英語教育を導入する際の問題点は何か。
- ③ 早期英語教育は英語能力の育成に効果があるか。
- ④ 英語教育は「国際理解」に役立つか。

論文執筆とは、まずトピック（論題）を設定し、その問いに答えるための明晰な筋道を立て、文献資料を駆使して、論理的に読み手を説得していくという知的作業です。本来はその作業すべてをみなさんが一人で行なうわけですが、今回の課題「ミニ論文執筆」は学術論文の書き方に慣れる練習ですので、トピックも資料となる文献も教員側で用意しました。論文だからといって、難しい表現を使おうとする必要はありません。パラグラフ構成に注意し、わかりやすく論理的で説得力のある論述を心がけてください。

「大学生の勉強法」を教える初年度授業

また、この授業で学んだことの集大成となる中論文課題の内容は、以下の通りである。中論文の執筆が中心となる後期の授業では、引用の仕方、注釈や文献表の書き方を必ず指導する、ということを確認し合った程度で、あとの細かい指導は各班の担当教員にまかせた。ブックレポートとミニ論文については扱う内容を完全に統一していたが、中論文の場合は、あまりテーマを限定しすぎると教員側にも得意分野と不得意分野があるので、ある程度の自由度を保持しようということになったのである。

課題3：中論文（4000字以上）

この1年で学んだことの総仕上げです。授業で習った論文の書き方にそって、各自が選んだトピックで中論文を作成してください（4000字以上）。注釈や文献表の書き方に注意すること。

中論文のトピックのを見つけ方、問いの立て方については、ヒントになるようなプリント等を教員が自由に用意した。たとえば私の班の場合は、以下のようなプリントを参考資料として配付した（図2）。

翌年の2006年も、担当教員が入れ替わっただけでほぼ前年の授業内容を踏襲した。

論文トピックのを見つけ方（例）

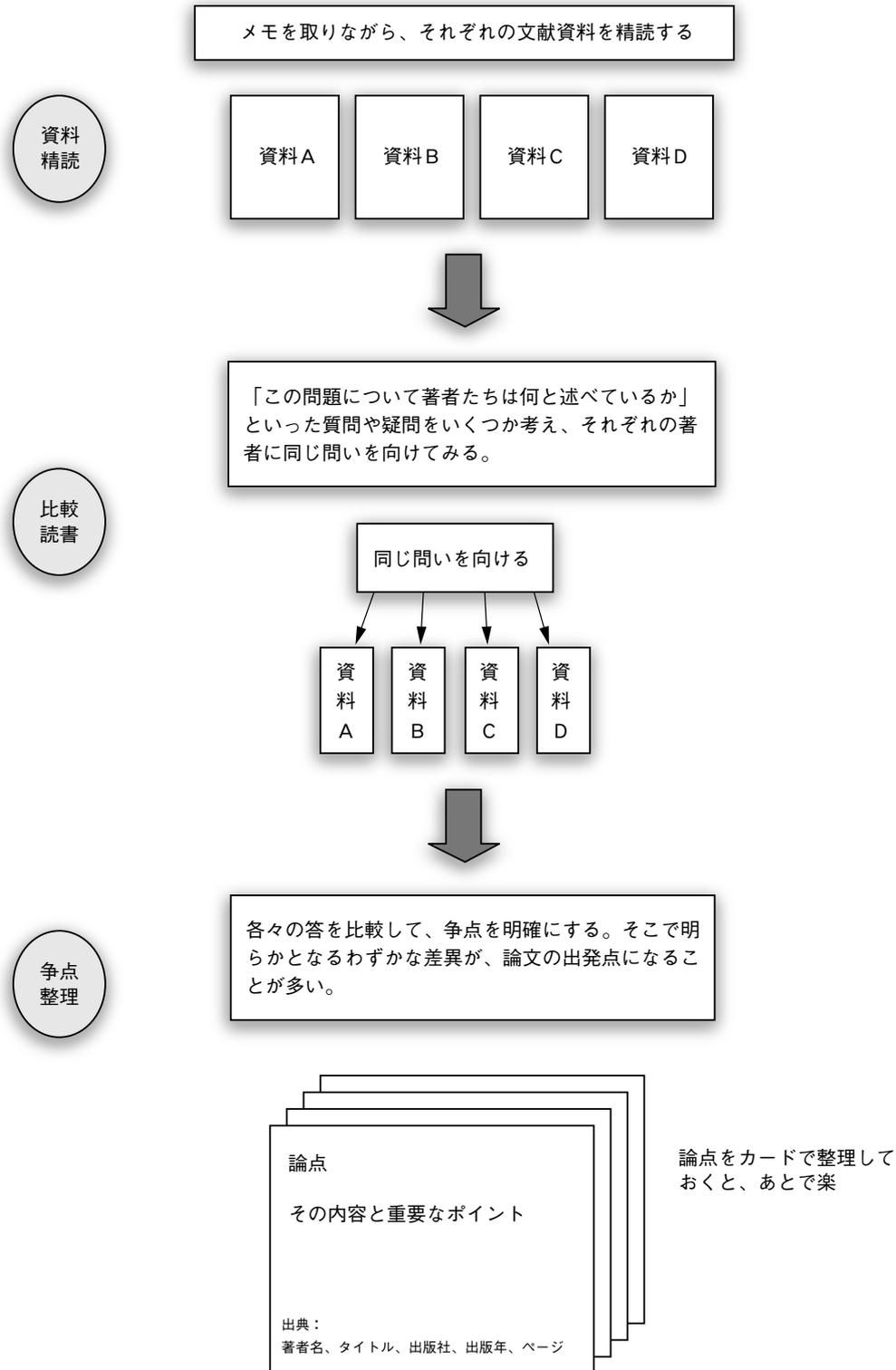


図 2

3.5. 2007年 — Webを使ったレポート提出・公開

この年からは、Webを活用したレポート提出・公開システムを取り入れ、教員同士、学生同士が他の班のレポートを互いに読むことができるようにした。このシステムは、簡単にいえば、書いたレポートをWebから提出できるホームページである（図3）。ブラウザから投稿されたレポート（ブラウザ上で直接入力してもよいし、Word等のワープロソフトで書いたものをコピーペーストしてもよい）は、送信順に1枚ずつのカードとしてページに追加されていく。このページは締め切りまでは投稿モードなので、レポート提出の時点では、学生は他の学生のレポートを見るができない。提出締め切り日が過ぎ、公開モードとなって初めてすべてのレポートをホームページ上で閲覧することができる（公開するのはレポートの中身だけで、執筆者の個人情報には開示していない）。学生同士、お互いのレポートを読む機会はなかなかないと思うが、それぞれのレポートを見せ合うことで、批評する力を養い、互いの論文の質を高め合うことができる。自分が書いたものに責任を持つという自覚も生まれるし、論文書きが下手な学生は、上手な学生のレポートを参照することで、論述のコツをつかむことができる。このシステムの教育効果については今後さらに検証が必要だが、少なくともマイナスとなる要素は今のところ見受けられない。

翌年も概ねこの授業形態に倣った授業運営を行なった。2008年からの新しい試みとしては、論文の書き方に関するガイドブックを共通テキストとして指定したことである。これまで、論文の書き方に関する参考文献は授業内でもおりにふれて紹介していたが、本を指定して学生全員に購入させるというところまでは徹底していなかった。だが2008年からは、論文作成のための基本的なガイドブックとして、戸田山和久『論文の教室 — レポートから卒論まで』（NHKブックス 2002年）を全員に持たせることにした。論文・レポートの書き方に関する書物は数多く出版されていて良書も少なくないが、中には「論文の構成は起承転結で」などと述べているような、いい加減なものも存在する。その点このガイドブックは、「問いを立て、論証し、結論を述べる」という論文執筆の作業について、初心者向きにわかりやすく具体例を挙げて説明している（面白くしようとして、やや饒舌すぎることもあるが）。「パラグラフ」という概念の重要性についても的確にまとめられており、値段も手頃である。当面はこの本をサブテキストとし、最初の課題であるブックレポートもこの本についてまとめさせることにした。



図 3

4. これまでの授業運営で見えてきたこと

このように、言語文化基礎演習はそのつど改善の手を加えて現在の開講形態へと至った。この授業の年間スケジュールは、ほぼ以下のような流れに定着しつつある（図4、図5）。

しばらくのあいだは、基本的にこの形態が維持されて行くだろう。最後に本稿のまとめとして、この種の授業の運営においてもっとも重要となるであろうポイントを簡単に整理しておきたい。

まず強調すべき第1点は、担当教員間のミーティングの重要性である。アカデミックワークのインフラとなるこの種の授業では、学生全員に同じ質の授業を提供することが大前提である。担当教員によって授業内容がバラバラにならないためには、教員同士の連携と情報交換が欠かせない。定期的なミーティングの時間を持つことは必須である。

重要なポイントの第2点は、文献読解練習用テキストの選び方である。テキストの選び方は、担当教員も毎年悩むところである。理想としては、読んでいて面白く、かつ学科の性格とも関

「大学生の勉強法」を教える初年度授業

言語文化基礎演習 前期予定表

合同オリエンテーション 50分、班別オリエンテーション 30分											
第2回	班別 授業開始	1班	2班	3班	4班	5班	6班	7班	8班	9班	10班
第3回	文献 を読む	やや難しいテキストを精読して理解し、その内容について発表したり、他者と議論したりする練習 テキストをともに読む 読解ノートを作らせる 本の内容を説明させる 意見交換させる パラグラフという概念を理解させる								1班	6班
第4回										2班	7班
第5回										3班	8班
第6回										4班	9班
第7回										5班	10班
第8回	ミニ 論文を 書く	先の共通テキストに関連したテーマをめぐって、ミニ論文を書く練習 (資料となる参考文献は教員側で3種類ほど用意) 参考文献をともに読む 論文のアウトラインを作らせる、発表させる パラグラフを単位とした文章構成法を教える ・注釈の基本的な書き方を教える (資料配付) ・文献表の書き方を教える (資料配付) ・提出させたミニ論文を添削し、返却する ・個人面接を行なう								1班	6班
第9回										2班	7班
第10回										3班	8班
第11回										4班	9班
第12回										5班	10班
第13回											

図 4

言語文化基礎演習 後期予定表

第14回	後期授業開始 顔合わせ	1班	2班	3班	4班	5班	6班	7班	8班	9班	10班
第15回	ミニ 論文 添削 ・中 論文 準備	設定したテーマ (分野) に関連したテキストの精読、発表、議論など									
第16回											
第17回											
第18回											
第19回											
第20回	中 論文 を 書 く	テーマから立てたトピックについて、中論文を書く (授業内容は自由に構成) ・テーマに関連して、論文のトピック (問い) を立てさせる ・注釈、文献表の書き方を具体例で示す ・中論文のアウトライン作成、構想発表など									
第21回											
第22回											
第23回											
第24回											
第25回	面 接	中論文 (後期課題) の添削、個別面談、返却、再提出 (各班ごとに必ず行なう)									
第26回											

図 5

連した内容であり、パラグラフ・ライティングのお手本となるような文章であること。学生たちの知的好奇心を刺激して、中論文執筆のトピックを考える上でさまざまなアイデアを提供してくれるものがベストだろう。過去5年間に使用したテキストは以下の通りだが、値段の関係でなるべく新書から選んでいることもあり、上述したすべての条件をクリアする書物はなかなか見つからない。

2004年 荻谷剛彦『教育改革の幻想』ちくま新書 2002年

2005年 山田雄一郎『英語教育はなぜ間違うのか』ちくま新書 2005年

2006年 鈴木孝夫『ことばと文化』岩波新書 1973年

2007年 新渡戸稲造『武士道』講談社バイリンガル・ブックス 1998年

2008年 青木保『異文化理解』岩波新書 2001年

(+論文作成のガイドブックとして、戸田山和久『論文の教室－レポートから卒論まで』NHKブックス 2002年)

最後に第3点として挙げておきたいのは、インターネットの功罪である。論文執筆に有効な資料を提供してくれるサイトが数多く存在することは私自身も認めるが、その一方で、検索エンジンとコピーペーストの時代の論文・レポート執筆には、剽窃の問題が必ずついて回る。われわれの授業でも、開講初期にこの問題が浮上した。用いる資料や書き方を細かく指定したり、書いた論文の公開を義務づけていたりしているのは、そういった経験から生まれた策でもある。「トピックは何でもいい」といった安易な課題の出し方は、絶対に避けるべきである。

おわりに

学術的な文章作法や知的生産の技法を扱った本は、邦文でもかなり多く出版されており、ベストセラーになっているものも多い。ただ、それらの書物の購買層は、日本の場合、これまでは大学生よりもむしろビジネスマンが中心だったと思われる。社会人になって企画書や報告書を書くようになってはじめて、資料整理の方法や論理的で説得力のある文章の組み立て方など、知的作業の基本的技術の重要さに気がつくのであろう。だがあらためて言うまでもなく、この種のスキルは学生生活の初期の段階において（本来であれば高校までに）鍛え、しっかりと身につけておくべきものである。私は、本稿で紹介した「言語文化基礎演習」以外にも、関連科目として、学部生全体を対象とした「表現の技法」という講義を受け持っているが、この種の授業に対する学生たちの意欲と関心はきわめて高い。その理由は、就職活動時に彼らに課せられるエントリーシート、グループディスカッション、小論文、面接といった課題に対処するに

「大学生の勉強法」を教える初年度授業

は、実は「論文の書き方」にからむノウハウがそのまま活かせるということに学生たちが気づいているからである。キャリア教育関係の授業に学生たちが多く押し寄せるのもそのことと関係している。現代の学生たちのこういったニーズに応えるためにも、本稿で紹介したような授業は、大学初年度教育には必須の科目とってよいだろう。